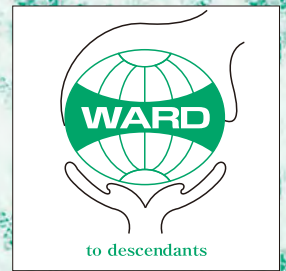


WARD

ウオード

World Association of Representatives for Descendants

世界子孫代理人会



WARDで行動するために考えたこと

A THOUGHT OF MY CONDUCT UNDER A MEMBER OF THE WARD

はじめに: 20年を超えるWARDの活動がいつも明晰でユニークなのは、会の名称とロゴマークに表れていますが、渡辺英男会長自らが明瞭な言葉で会報に趣旨と方向を発信し続けていることや、会員一人一人が自助と共助の気持ちで歩んでいることに感じています。

私のWARD活動は、総会や定例会にほとんど出られなかったので、会報に意見や便りを送ることでした。職場が大学だったので農学と科学技術面から環境問題をとらえ意見とし、退職後海外に住んだ折にはそこで感じたことを便りに、また広島からは放射能被爆や平和の問題を考えてみました。

農業から: わが国の農業は、いのちや環境からではなくよく経済性で国際比較され、効率や能率が低すぎると断定、規模の拡大や企業化の必要性が指摘されています。しかし農産物は太陽と大地からの恵みと言われるように、生き物からの贈り物で、工業製品と違い投資や機械化することで効率よく生み出され続けることはありません。企業の求める効率と能率の向上は、農地面積や気象という動かしがたい制限要因と作物という生き物の特性に阻まれるからです。

農業の役割は、収穫を得るとともに、その維持と持続に伴う環境修復力など、農の多面的機能の発現にあり、安定した農業の継続がなによりも大切なのです。しかし残念ながらこれらの機能が市民に理解されていないように感じられます。

WARDでしばしば農業を取り上げたのは、農はいのちを支える源であり、環境問題を考える基本となるからです。農業が醸しだすわが国の美しい景観や里山生態系などは、健全に維持された農業と安定した気候、人々の営みと自然のバランスが生み出したたまものです。しかし私どもが最近市民講座で取り上げた水田作と畑作の環境保全機能では、その大きな違いに気付かされ、また有機栽培、無農薬・減農薬栽培などによる生産物に、安全や安心の信頼を添えるには、農業者、専門家、消費者による検討と検証が必要なことも強く感じました。このように地域の健全な農業の存続にも、市民の積極的な関心と参加が不可欠なのです。

科学技術から: わが国の科学技術は、経済の成長や拡大と結びつき、発展を支えただけでなく、深刻な公害や環境汚染をもたらしたのですが、これらへの対処もまた科学技術が貢献するという矛盾に満ちた足跡を残しています。よく科学は文明としての歴史が浅く自己抑制機能が効かないのだ、などと指摘されますが、政治や経済に便利に利用され、支配までされやすい性質を備えているのです。そこで以前から科学者が守るべき三原則は、自主、民主、公開だと教授されてきました。しかし科学が巨大化し大きな資金を要する今日、この原則は完全に無視され、理化学研究所のSTAP細胞事件に見られるように、研究資金の獲得が組織繁栄の全てだとするような、

滑稽に映る行動となっているのです。ここでも市民は情報を面白おかしく受け取るのではなく、研究組織に自浄能力がなく、行政や政治の指導力にも限界があることをみぬき、根本からの解決は、市民が関心を示し、行動することだとしなければなりません。この指摘の確かさは、かつて公害をかかえた時代の環境政策が、住民運動により革新自治体を成立させ、条例により国の基準を上回る実効性の高い規制となったことで、公害を克服した実績に表れています。

放射能被爆から: わが国はいま、原爆被爆国であるとともに明らかに放射能汚染加害国となっています。残念ながら日本政府は核兵器廃絶に消極的であり、理由があり停止させられている原発の再稼働を急ぎ、海外への原発の売り込みに熱心です。WARDでは、3.11以前から、核兵器廃絶と原発廃止を訴えています。理由は、処理できない膨大な放射能廃棄物を抱えている現実で十分ですが、福島原発事故がなかったとしても、また安全審査に関わる問題を別にしても、世界の人々と、未来世代に対する責任を重く感じる立場から、政府の判断と行動に強く反対せざるを得ません。

おわりに、「足るを知る」: 私のような高齢者世代は、不安定な雇用で苦しむ働く世代からは、無事退職した逃げ切り者だとみなされ、さらに環境を破壊し、資源を枯渇させ、廃棄物を累積するなど、地球上に負の遺産を残し続けた者として、断罪されるでしょう。したがって今世紀の根本課題は「未来世代への責任」、とすることに同意しますが、多くの人々はここに至っても、人間が欲望の固まりだといわれるとおり、経済成長や景気の盛り上がりを求め続けています。

しかし、経済成長がなければ人は豊かになれないのか、という問いに、経済のゼロ成長は人々の進歩を阻むものではなく、教養や生活の改善で社会と文化の進歩になる、とする見解に、また、人々に必要なことは働くことではなく、健全に暮らすことだとし、オランダではこの考えを国策として実践、暮らしを内輪で平和であればよしとし、これに必要なだけ働くことで、残業をやめ週休2日制を築き、夏のバカンスを定着させたとされ、勇気づけられます。

WARD会員は地球環境の変化に早くから気づき、子孫に対する責任を果たす人間として、様々な考えの人々と複雑に絡み合う社会で活動しています。従ってその場ではたゆみない変革に直面しますが、変革を起こし支える力は個人のもので、一人一人のしっかりした思いが必要で、私にとっては「足るを知る」です。中国伝来のこの教えは、欲望を抑えることで、人はこれで自由と安心の境地になれると、世界で共有されている思想です。この豊かな時代に広がるかが課題ですが、WARDでまず広まることを期待しています。

山本禎紀 広島大学名誉教授 WARD理事 SADAHI YAMAMOTO



地球は子孫から借りているもの WE BORROW THE EARTH FROM OUR DESCENDANTS

46億年・地球の道 WAY OF 4,600 BILLION YEARS OF THE EARTH

地球を1億分の1に縮小すると、直径13cmほどのボールになります。手のひらに乗るその大きさの地球上で、私たちが呼吸できる空気はどれくらいの厚みがあるか？空気が薄いために高山病の症状が出る人も多い富士山は標高3776m、それを1億分の1にすると…0.03776mm。ちなみにセロテープの厚さは0.05mm (50ミクロン) です。

地球の大きさに対して空気はそれほど薄いのか！とびっくりしたのが地球科学に関心を向け始めたきっかけでした（同時に思ったのは、こんなに少ししかない空気のもとで進行している環境汚染、大量生産大量消費、兵器を製造しなければ持続できない経済システム…安穩とされている時ではないでしょ！でした）。

そして海の深さを知り、海底の拡大、プレートと地震の関係、火山噴火のしくみ、マントルの対流など地球への関心は広がっていきました。

先日、東京・立川にある国営昭和記念公園へ行ってきました。公園内に脚本家の倉本聰さんが作った富良野自然塾、その東京校が開設されていると知ったからです。

この自然塾は地球環境と私たち人類の生き方を見つめ直そうと始められたもので、公園には直径1mの地球の模型（一部が中心へ向けて切り取られており、地球の内部の仕組みが分かるようになっています）と46億年・地球の道ができています。

この地球の道は、地球が誕生して現在まで46億年を460mに置き換えて歩けるようになっています。道沿いには札が立てられています。たとえば「45億年前 マグマオーシャンの時代」「40億年前 原始海洋誕生」「27億年前 地球磁場の出現」「2億年前 恐竜の時代」など。

そして道を進むにつれて札の立ちかたは小刻みになり「6500万年前 巨大隕石落下」「700万～500万年前 サルからヒトへ」「20万年前 ホモサピエンス誕生」となり、最後が「現在」。

460mの道なので10mにつき1億年…ということは1mmが1万年！人類が出現して20万年、ということは2cmにしかありません。「年を円に置き換えるとピンときますよ」とおっしゃる地球科学者の鎌田浩毅さんにしたがつと、ヒトの歴史は20万円、たしかに身近になりますネ。そして人類最古の絵画ラスコー洞窟の壁画は15,000円、エジプトのピラミッド5,000円、富士山の最新の噴火はたった300円（笑）

460mの道の終点、「現在」の札のうしろには大きな石があり、そこには「地球は子孫から借りているもの」と彫られています。これはWARDの主張そのまま、現代社会で便利さ快適さを享受している私たちに諷める言葉と受けとれますが、北米のネイティブアメリカンの間で伝えられてきたもののようです。

We do not inherit the Earth from our Ancestors, we borrow it from our Children.

ネイティブアメリカンのことわざには自然に対する畏敬の念にあふれたものがたくさんあります。それだけ彼らが自然の営みに敏感で、その美しさと恵みに感謝する気持ちが強いから、そしてその自然が先に続くことを願ってこの表現が出きたのでしょう。



それにしても、地球の時間からしたらほんの一瞬の間に、人類が広大な宇宙を扱うマクロの世界を、そして原子分子や微生物などミクロの世界を解明しつつあることは驚きです。おかげで、地球上に最初の生物が誕生して38億年、2度にわたる大量絶滅期を経たものの、その命は絶えることなく今までつながってきた……というすごい事実！を知ることができました。

その長～いつながり、大～きな循環の中で生を受けた私たちです。（我々の身体、たとえば心臓はいつときも休むことなく活躍してくれていますが、これも自分ががんばっているわけではなく生かされている証ですね）。自分のものではあるけど、自分のものではない命、ていねいにつき合っていきたいものです。

◆富良野自然塾 <http://furano-shizenjuku.com>

インストラクター付きの体験プログラムは要予約で有料です。

藤田妙子 TAEKO FUJITA 東京都

第23回WARD総会・フォーラム

23TH WARD GENERAL MEETING & FORUM

4月29日(祝)、渋谷の文化総合センター・アイリス(8F)にて13:30より第23回 WARD 総会と記念フォーラム“生き物がヒトを育て、マチを育てる”が行われ、盛況のもとに16:30に閉会した。

【総会】

渡辺英男会長の開会の挨拶の後、2013年度の会計報告と活動報告があり、特に活動報告としてwebでのコミュニケーションの大切さから、ホームページの作成・維持にあたり専任者を決めたとの報告があり、今後はSNSへの対応も考え、新しい会員の獲得とWARD発展へのコミュニケーション活動に対し努力を惜しまない事を述べた。この後、WARDホームページ(www.ward-ngo.com)のリニューアル・デモンストレーションが行われた。引き続き2014年度の活動方針・計画の議事に移り、組織部、青年部、調査部、教育宣伝部、渉外部、表彰部、財務部等、各部の活動の自主性と、外部との交流のさらなる促進に力をいれることを宣言した。その後、2014年度予算案の承認、役員改選、感謝状贈呈(リスト別掲載)があり、参加者全員でスローガンを唱和して総会を閉じた。

【フォーラム】

10分の休憩のあと、本日の記念フォーラム<生き物がヒトを育て、マチを育てる>が行われた。今回は渋谷みつばちプロジェクト代表でもある佐藤勝理事の働きかけで、NPO法人渋谷さくら育樹の会との共催になり、実践活動をしている関係者が多数参加された。フォーラムに先立ち渡辺英男会長と渋谷さくら育樹の会会長佐野とも子さんの挨拶があり、藤田暁生理事の司会で、各パネラーによる下記の講演と活動報告が行われた。

○<地球の未来を支える子供たちへの環境教育>

永井伸一・独協医科大学名誉教授・WARD 副会長

○<マチに花咲く植物を>

佐々木正巳・玉川大学名誉教授・昆虫学

○<ミツバチ生産物と健康>

松香光夫・元玉川大学教授・養蜂科学WARD副会長

○<活動報告:ひまわりガーデン代官山坂プロジェクト>

石原貞治・代官山ステキな街づくり協議会事務局長

○<活動報告:代官山緑の文化十字路>

岩橋謹次・NPO法人代官山ステキ総合研究所代表

○<活動報告:渋谷・代官山・中目黒の桜とみつばちプロジェクト>

佐藤勝・渋谷みつばちプロジェクト代表・WARD 理事

パネラーの映像を駆使した興味深い話と参加者の活発な質問や活動報告等、大変内容の充実したフォーラムとなった。最後に、環境教育に力をいれている独協中・高校の塩瀬治先生(当会理事)と共に参加した生徒たちの報告があり、自分たちがやっている“緑のネットワーク”活動を広げたいなど、環境教育の大切さを聞くことが出来、未来への希望が見えた。予定時間をオーバーしても終わらず、話し足りなかった人も多かったようで、終了後もあちこちで話の輪ができていた。

書記 斉藤光弘 MITUHIRO SAITO・WARD理事

2013年度会計報告

FINANCIAL REPORT 2013 2013.4.1~2014.3.31 単位 円

1. 収入の部			2. 支出の部		
予 算	決 算		予 算	決 算	
繰越金	371,483	371,483	会報費(印刷・発送)	280,000	252,470
会 費	400,000	361,220	会議費	110,000	50,760
寄付金	400,000	360,000	事務所費	360,000	360,000 寄付
雑収入	28,517	10,301	備品費	10,000	0 寄付
合 計	1,200,000	1,103,004	消耗品費	10,000	0 寄付
			通信費(電話・郵便)	40,000	36,500
			交通費	10,000	0 奉仕
			印刷費	30,000	0 寄付
			宣伝費	100,000	150,000 ホームページ
			調査費(文献他)	30,000	0 奉仕
			感謝状贈呈費用	40,000	40,000
			雑費	20,000	0
			繰越金	160,000	212,854
			合 計	1,200,000	1,103,004

*備考:WARD基金(2002年設立)1,000,000円は別途積み立ててある。

役員 OFFICERS OF WARD

理事:

Bruce Young	オーストラリア	藤田暁生	東京
干場英弘	東京	井上凱夫	愛知
市川直子	東京	加藤正彦	神奈川
Carol Kirk	米国	Luis Cangas	スペイン
Mathias Lambrecht	ドイツ	松香光夫	東京
南 勲	青森	峰岸勝昭	東京
永井伸一	神奈川	大沢 力	東京
斎藤光弘	東京	佐藤 勝	東京
塩瀬 治	埼玉	鈴木 勲	静岡
田中淳夫	東京	田中国智	東京
渡辺英男	東京	山本禎紀	広島
吉永喜美子	東京		

監事:

佐藤寛治	大分	田口謙司	神奈川
------	----	------	-----

2014年度感謝状贈呈

CERTIFICATE OF APPRECIATION FROM WARD TO THOSE WHO WORK FOR FUTURE MANKIND, IN 2014

未来の人達に貢献している次の方々（敬称略）へ、子孫に代わって、WARDから感謝状が贈られた。

出雲 充

（株）ユーグレナ社長。「ミドリムシ」（学名ユーグレナ）の研究を重ね、野外大量培養方法を開発した。この生物は、動植物両方の特徴をもった体長0.05ミリ程の藻の仲間で、光合成をし続け、大気中の二酸化炭素を吸収して、酸素と豊富な栄養素を生産する。大量生産が可能になった事から、21世紀の人類が直面する環境・食糧問題の解になると期待されている。さらに、ミドリムシから油脂分を抽出し、石油に代わる次世代燃料の開発を進めており、地球と人類の未来に希望を与えている。

詳しくは、<http://www.euglena.jp/labo/>をご覧ください。尚、本人から丁寧な礼状と共にユーグレナ製品と資料が贈られたので、9月定例会で披露した。



ミドリムシは体長約0.05mm位の藻の仲間。
光合成を行い、炭酸ガスを吸収し酸素と栄養素を生産する。

島田 恵

フォトジャーナリスト、映画監督。チェルノブイリ原発事故後、六ヶ所村に住み、20余年核燃問題を生活者の視線で撮りつづけた。又、東電福島第1原発事故後は福島を撮り、この時代を映像で未来の人達に伝えようと、2013年、原発社会の入口と出口を描いた「福島六ヶ所未来への伝言」を制作した。また、写真集「六ヶ所村核燃基地のある村と人々」、著書「いのちと核燃と六ヶ所村」などを通して、消すことの出来ない放射性廃棄物を未来に増やし続ける罪と大人たちの責任を問い続けている。島田さんの活動については前号で紹介させて頂いたが、詳しくは<http://www.rokkashomirai.com/>をご覧ください。

尚、本人から丁寧な礼状と上記映画のDVD・資料を頂いたので、会員に回している。

Prof. Daniel Sperling (USA)

カリフォルニア大学教授。交通輸送が環境に及ぼす影響について、車両技術、燃料、人間の行動様式等の視点から研究を進め、高効率で低炭素、そして環境に優しい輸送システムを構築するための、新たな研究分野を開拓した。また、世界の自動車会社他の技術に影響を与え、都市の環境政策に対して大きな進歩と指針をもたらし、地球環境改善に貢献している。

Dr. Joerg Ledderbogen (ドイツ)

ハノーバー市（ドイツ）生物教育センター副所長。植物学、分子生物学、生化学、物質生産学を専攻。大量生産・消費の環境への影響やビオトープと人との関わりなど、環境教育を主要なテーマにし、先進的なドイツの環境教育を世界の教育現場で行い、公平で安心できる社会を目指し、子孫に良い環境を遺すことに貢献している。

岡田卓也

財団法人イオン環境財団理事長。21世紀のキーワードは「環境」であると捉え、この問題を解決する目的で1990年に同財団を設立した。以来20余年、グローバルな視点で、様々な国や地域で、市民と共に、植樹・植林など、地球環境改善活動や環境NGOなどへの支援を行っている。同氏はこの財団に巨額の私財を投じ、国内外に植えた木は1,000万本を超えた。これら木々は年々育ち、増殖して、計り知れない価値を生み、未来に生きる人達を潤すでしょう。詳しくは、<http://www.aeon/ef/>をご覧ください。

尚、本人から、丁寧な礼状と書籍・資料・DVDと高級ワインを頂きました。ワインは9月定例会で、岡田さんの偉業に乾杯して頂きました。



中国・万里の長城の植林、累計植樹本数は100万本

未来の平和を脅かす集団的自衛権

RIGHT OF COLLECTIVE SELF-DEFENSE TO THREATEN THE PEACE OF FUTURE



安倍政権の念願でもあった憲法改正問題も含め今年の春から政府与党の中で議論されてきた集団的自衛権について考えてみたい。政府の論旨とすれば、国民を守るために憲法9条を変えることなしにその論理の枠内で集団的自衛権を行使すると説明しているが、その後安倍首相の外遊先でドイツ、オーストラリアなど日本と密接に関係している国々に対しても軍事的な支援を惜しまないと明言している。7年前の第一次安倍内閣以来国家安全保障基本法の制定を目指しこれまであった自衛の措置としての武力行使容認の3つの条件、①我が国に対する急迫不正の侵害があること、②これを排除するために他の適当な手段がないこと、③必要最小限の実力行使にとどまること、この部分の解釈をさらに同盟国にまで広げ、新たに「日本に対する武力攻撃発生、又は密接な関係国に対する武力攻撃により日本の存立が脅かされる場合」と規定している。

原子爆弾に代表されるように、戦争は狂気であり決して正当化されるものではない。しかし私が最近読んだ本の中に、日本の軍国主義の中でリトアニアの領事館が廃館になるまで、ナチスドイツに追われるユダヤ人のために日本への通過ビザを発行し続け、約6,000人の命を救った杉原千畝や、そのビザで満洲を経由し日本に逃げてきたユダヤ難民を、ドイツの抗議を一蹴しアメリカへ向け出国させ彼らの命の恩人となった日本の政治家もいたことを知り、少しほっとすると共に一縷の望みを感じた。

今年6月に旧ユーゴスラビアを旅したが、未だにボスニアでは内戦による爪痕があちらこちらに見受けられ、内戦当時の人々の悲しみや苦しみを感じ、深く胸を痛めた。身近な話では、現在は平和になったクウェートにイラク軍が急に進行してきた時に、クウェート大使館に赴任していた姉の家族が命からがら帰国したこと、また平和維持隊としてイラクで任務を遂行していた自衛隊員は、現地住民に感謝されつつも極度の緊張感などから後に精神疾患を患い自殺した隊員もいたことなどを考える



ボスニアの街中に今も残る銃弾の跡

とやはり戦争という狂気は一刻も早く廃絶することを切に願う。

ここで近年米国が関わってきた戦争を振り返ってみると、ベトナム戦争、イラク・アフガン戦争など、そこにはまさしく集団的自衛権の名のもとに武力が行使され、アメリカをはじめいくつかの国の若者が戦争に駆り出され、戦死している。もし当時日本が集団的自衛権を行使していたら間違いなく隊員に100人以上の死者が出た可能性は否めない、と当時の指揮官は語っていた。国内では、個人的自衛権と集団的自衛権を国益や国民を守るという美辞麗句で説明されているが、対外的には日本は同盟国のためにいつでも戦争ができる立場にあると単純に宣言しているように思えてならない。しかも国会内で議論は徹底されず、たった70名程度の与党議員の考えを国民に説明したに過ぎないのである。我々WARDが目指す、子孫を代理して物を言う立場や、世界連邦のように世界をひとつの国と考えて活動をする人々など一般市民からも広く意見を取り入れ、如何に戦争ができる国になるかではなく世界から戦争を如何に無くしていくか、という議論を進めることが肝要で、平和の名のもとにアメリカの利権や金儲けの道具にされないためにも我々国民が政治を監視し、戦争のない世界を提唱していくことが、子供たちや未来の子孫のために我々に課された責任であると考えている。

田中まゆみ MAYUMI TANAKA 東京都

子孫の目



原発は“持続不能”の典型 NUCLEAR POWER PLANT IS TYPICAL OF “UNSUSTAINABLE”

世界が「持続可能」「未来との共有」を掲げて久しいが、人々はライフスタイルを変えられず、指導者は経済成長を謳い、次々と未来を奪っている。その典型が原発である。

チェルノブイリでは168の村が持続不能になった。フクシマでも、コミュニティーが根こそぎ破壊され、故郷を追われたまま10数万人が我が家に帰れないでいる。放射能は半永久に消えないから、子孫たちがどんなに努力しても元に戻すことは出来ない。食糧を生み出した豊かな大地は失われ、子孫の生活圏は狭められてしまった。

また、除染、廃炉、核廃棄物処理、賠償にかかる費用は余りにも巨額で、電力会社に負えるものではない。果ては国民の負担になるが、未来に皺寄せられ、子孫が負うことになる。

更に問題なのは健康被害である。チェルノブイリでは、事故後5～10年に甲状腺癌、小児白血病などが増え、近年、被曝した子供から奇形児が生まれている。傷ついた遺伝子が子孫に引き継がれる事が確認されたのである。3年余を経たフクシマでも、子供の甲状腺癌が増えだした。これから、汚染地域の農産物・水産物による内部被曝が心配される。加えて、廃炉・放射性廃棄物・使用済み核燃料の処理・保管作業をする人達の被曝は避けられない。未来永劫に続くざるを得ない作業で、どれだけの子孫が苦しむだろうか。

子孫は、原発の恩恵を何一つ受けることなく、放射能を浴びながら、先人達の後始末に多額の費用と時間をかけ続けなければならない。即ち、健康とお金と時間を奪われ続けるのである。原発は危険で子孫に悪影響を及ぼすと知りながら、その解決方法もないのに、目先の経済のために稼働するのは、正しく「子孫への犯罪」である。子孫にとって原発は消えることのない悪質な負の遺産なのだ。

ところが、日本政府は「エネルギー基本計画」で原発を「重要なベースロード電源」と位置付け、再稼働の方針で、原発の輸出をも後押ししている。経済を切り切るためと思われるが、原発が抱える課題を解決する道筋を明らかにするのが先である。地球・命・平安・未来を見据え、ヒロシマ・ナガサキ・フクシマを知った日本が世界を導けないのか。

しかし、一方で、日本は原発稼働ゼロである。夏も4度クリアし、原発なしでやれることを証明した。この実績は誇れる。これは国民全員の成果だ。それぞれの立場で、省エネに寄与し、再稼働にブレーキをかけているからだと思う。原発は止めるべきだと思っても、意思を表に出さなければ、外からは思っていないのと同じばかりか、支持しているとみられる。どんな立場に在っても、表す方法はいくらかでもある。「もし、未来に配慮して下さるなら、原発廃絶の声を上げて欲しい・・・」と、子孫達の声なき声が聞こえる。

WARD会長 渡辺英男 HIDEO WATANABE

WARDホームページリニューアル

NOTICE : WARD HOMEPAGE RENEWAL



WARD

World Association of Representatives for Descendants

今年度の4月より、WARDのホームページをリニューアルし、アドレス(ward-ngo.com/)もアクセスし易い簡単な形に変更致しました。

トップページも、WARDの考え方をビジュアル的にイメージできるようにし、全体的には、流行にとらわれることなく、オーソドックスな形のサイトで、誰が見てもわかり易く、会員相互の情報共有が簡単にできるという点に主眼をおいて制作いたしました。

具体的には、WARDの考え方や、存在意義、活動状況や報告、それぞれの会員の方々の活動や活躍を、このサイトを見るだけで理解できるようにすること。

また、会員間のみならず、外部の方々との情報交換、意見交換をもっと充実したものにするなどの特を留意しました。

このことで、会員同士が集まることはなくとも、繋がっている。そんな空間が創造できればと考えています。

とは言え、現実にはまだまだ外国語版等の制作や、使いやすさ等の課題も多く残っているのも事実です。

このサイトを、WARDそのものの成長に寄り添いながら時間をかけ進化させて行きたいと考えています。

そのためには、このサイトを出来るだけ多くの方々にご使用いただき、忌憚のないご意見をお聞かせいただくことが必要です。

どうか、リニューアルに際し、このサイトを実際にご使用いただき、いろいろなお意見をお聞かせください。

本年度の総会の折も、会員の方々からいろいろ貴重なご意見をいただきましたが、皆さんとひとつひとつ考察しながら改善をしていきたいと思います。

このサイトの成長が、WARDの今後のますますの広がりや、発展、存続に大きく貢献することを願っています。

と同時に、矛盾するかもしれませんが、サイトはあくまでも、WARDの活動を補佐するアイテムの一つに他なりません。便利に使うのは良いのですが、過信することは危険です。仮想ではなく、現実が最も重要なのです。

WARDの活動と同様に、そのあたりももう一度考えてみる必要があるかもしれません。

以上、サイトリニューアルの報告です。ward-ngoは勿論、“子孫代理”、“世界子孫”だけでも検索できます。サイトに関するご意見、ご要望等遠慮なくお寄せ下さい。

様々な方面へのご紹介等も合わせてよろしくお願い致します。

(株)クリエイティブハート代表取締役 土井伸 SHIN DOI

WARD 44号(2014年10月20日発行)

発行人 渡辺英男

定価150円

編集人 加藤正彦

WARD事務局 〒152-0003 東京都目黒区碑文谷5-4-21

TEL 03-5721-1992 FAX 03-5721-8383

http://www.ward-ngo.com